

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

雨竜沼湿原 サイト

ー北海道雨竜郡ー

雨竜沼湿原は北海道北西部の増毛山地にある湿原で、東西約 2 km・南北約 750 m という北海道ではもっとも規模の大きな山地湿原です。この湿原は周囲を南暑寒岳・恵岱岳・群馬岳の 3 山に囲まれた標高 850 m の凹地に広がり、今からおよそ 1 万年前に成立したと考えられています。湿原内には多数の池塘が点在し、池塘の周辺には部分的に高層湿原植生がみられますが、湿原の大部分はヌマガヤを主体とする中間湿原植生です。これにシラネニンジンやキダチミズゴケといった多雪地・雪田の構成種が加わっています。



調査地の景観。池塘が点在しています。

2019 年度の調査結果概要

雨竜沼湿原サイトは今年度より新たに追加されたモニタリングサイトです。本サイトでは湿原を南北に縦断するように 1 本の調査ラインを設定し、ヌマガヤ群落やミズゴケ群落、ヤチスゲ群落など代表的な湿原植生の部分に合計 23 方形区を設置しました。方形区や水位計の設置および植生調査は 7 月 22 日から 23 日にかけて行いましたが、2 日目には風雨が強く、気象条件が良好ではありませんでした。植生調査の結果、絶滅危惧種のシロシラガゴケが 1 方形区で出現しました。

湿原植生に隣接するペンケペタン川の川岸や湿原周囲のチシマザサ群落内の登山道脇ではヒグマの掘り返しが多く確認されています。夕刻にはエゾシカの鳴き声が響くなど、植生に対する動物の関与は 30 年前に比べて大きくなっているかもしれません。外来植物の侵入は今のところみられないようです。

次の調査は 2022 年度に実施する予定です。

【調査者・調査協力者】

佐藤雅俊（帯広畜産大学環境農学研究部門）、首藤光太郎（北海道大学総合博物館）、内田暁友（斜里町立知床博物館）、横地 穰（北海道大学大学院国際食資源学院）、関本幸一（北海道大学大学院農学院）、佐々木純一（雨竜沼湿原を愛する会）、田畑早紀・吉川紀愛（環境省生物多様性センター）、横井謙一（日本国際湿地保全連合）



ホロムイイチゴ。



方形区内の植生調査の様子。種毎に被度と草丈を記録します。



イボミズゴケとウスベニミズゴケ。



多雪地にみられるキダチミズゴケ。



絶滅危惧種のシロシラガゴケがみつかりました。

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

釧路湿原 サイト

ー北海道阿寒郡ー

釧路湿原は釧路平野に位置する日本最大（18,290 ha）の湿地です。海水面が高かった約 6,500 年前に深い内湾となっていたところが現在の釧路湿原になったとされています。特別天然記念物であるタンチョウや準絶滅危惧種であるキタサンショウウオの我が国における主要な生息地であり、湿原内を流れる釧路川やコッタロ川などには国内最大の淡水魚イトウが生息します。湿原の大部分はヨシやスゲ類を主体とする低層湿原やハンノキ林ですが、温根内赤沼周辺及びキラコタン岬の南方にはミズゴケを主体とする高層湿原が発達しています。



一部損壊したチャミズゴケの小丘（ブルト）。
エゾシカによるものと思われます。



ハンノキの立ち枯れが目立ちます。



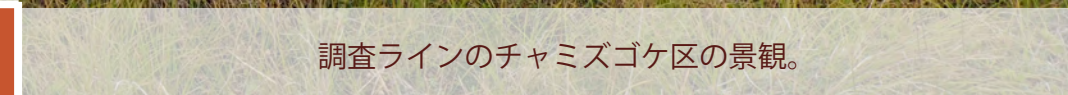
2019 年度の調査結果概要

2019 年度の植生調査は 9 月 6 日から 7 日にかけて実施しました。天候は薄曇りから一時小雨でしたが、概ね良好な条件で調査を行うことができました。釧路湿原の調査は開始から 11 年目・7 回目となりましたが（2009 ～ 2013、2016、2019 年）、今回はコケ植物の分類の専門家が参加し、一層充実した調査となりました。植生調査の結果は、全体としてはこれまでの調査結果と大きくは違いませんでした。ただし、調査ライン一帯ではエゾシカの攪乱による植生の変化が進行しているようにみえました。前回の調査で確認されたヨシの減少は今回も継続していました。高層湿原部ではチャミズゴケの小丘（ブルト）の損壊がみられ、ハンノキ林では立ち枯れが多くなり林冠の連続性が失われて林とは言えないような状態になりつつありました。開花植物数に関する印象も前回と同様で、数年前よりは多く目にするようになったものの、20 年前の 1 割程度の印象です。外来植物の侵入については、調査ライン一帯では今のところ認められませんでした。

次の調査は 2022 年度に実施する予定です。

【調査者・調査協力者】

佐藤雅俊（帯広畜産大学）、野原精一（国立環境研究所）、
樋口正信（国立科学博物館）



調査ラインのチャミズゴケ区の景観。



方形区の四隅に杭を打ち、内に出現する植物を記録します。



ヒメカイウの果実。
透明なゼリー状の果肉の中に種子があります。



ハンノキ稚樹。前回の調査で高さ 10 cm だったものが
3 年間で 70 cm までに生長していました。

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

八幡平 サイト

ー岩手県八幡平市ー

八幡平は、岩手県、秋田県に広がる奥羽山脈北部の山塊であり、山頂部が広く平坦なことから、「平」という名前が付けられています。火山現象と多雪によって生み出された数々の湖沼や湿原には、標高差や残雪の影響等により様々な植生が見られ、多様な生態系が形作られています。本サイトでは、八幡平山頂付近に位置する八幡沼の周囲に広がる湿原（八幡沼湿原）、並びにその東方約 2 km に位置する黒谷地湿原に調査地をそれぞれ設置しています。これらの湿原では、観光者等の踏みつけによる植生の荒廃や裸地化が問題となり、湿原の保全事業が行われています。



激しい降雨により冠水した湿原（黒谷地湿原）。



植生を記録する調査員。池塘にはミツガシワの葉が見られた。



霧に包まれる八幡沼湿原の様子。

2019 年度の調査結果概要

植生調査は 8 月 30 日に実施しました。調査は 2016 年度に開始し、今年度は 2 回目の調査となります。本サイトでは、八幡沼湿原にライン A（12 方形区）を、黒谷地湿原にライン B（11 方形区）とライン外の 3 方形区を設けています。調査当日は直前まで激しい雨が降っていたため、一つの方方形区は完全に水没して調査が困難でした。植生調査の結果は、全体としては前回の調査結果と比較して大きな違いは見られませんでした。

ライン A の湿原周辺部では、ショウジョウスゲやイワイチョウが優占していますが、ライン中央部に向かってヌマガヤやミヤマイヌノハナヒゲの優占度が高まり、イボミズゴケやワタミズゴケの厚いマットが確認されました。

ライン B では、中央部の微傾斜地にはシモフリゴケが生育し、平低部の大部分はワタミズゴケのマットが形成されていました。また、小さな池塘の頂部ではスギバミズゴケが、滞水する凹地ではヤチスゲがそれぞれ優占していました。今回の調査では、高層湿原に稀産するヤチランが確認されました。

次の調査は 2022 年度に実施する予定です。

【調査者・調査協力者】

竹原明秀(岩手大学)、金子誠也・上野綾子(日本国際湿地保全連合)



黄色く色づくイワイチョウの葉。



シモフリゴケ。



稀にしか出会えないヤチラン。

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

尾瀬ヶ原湿原 サイト

ー群馬県利根郡ー

尾瀬ヶ原湿原は、群馬県、新潟県、福島県の3県にまたがる面積約 760 ha の本州最大の山地湿原群です。周囲を燧ヶ岳、至仏山など 2,000 m 級の山々に囲まれた盆地の標高 1,400 m 付近に位置し、1 年の半分以上が雪に覆われる豪雪地帯にあります。湿原内ではゼンテイカやミズバショウなどの多様な湿原植物、流路に沿ってハルニレやサワグルミ、周縁ではダケカンバなどの高木が見られます。本サイトでは、湿原内の中田代地域（群馬県）に調査ラインを設定しています。



調査ライン付近から望む燧ヶ岳。

2019 年度の調査結果概要

植生調査は 8 月 10 日に実施しました。尾瀬ヶ原湿原サイトでは、これまで 2010、2013、2016 年度に植生調査を実施しており、今回は 4 回目となるため、この 9 年間の植生の動きが確認されました。

調査ラインに設置している 23 方形区において、植生の相観に大きな変化はなかったものの、全体的に乾燥している印象を受けました。植被率（方形区を面的にみたときの被度）については、草本層では大きな変化はみられませんでした。いくつかの方形区ではコケ層の植被率が減少していました。乾燥によってミズゴケ類のマットの表面がカラカラになっている様子も確認されました。シカなどの植生への被害は方形区内では確認されませんでした。調査ラインの周辺で、採食の形跡、ヌタ場、けもの道が見られ、植生への影響が危惧されました。

次の調査は 2022 年度に実施する予定です。

【調査者・調査協力者】
 竹原明秀(岩手大学)、安類智仁(片品・山と森の学校)、野原精一(国立環境研究所)、横井謙一(日本国際湿地保全連合)



花よりも濃い桃色の実をつけるヒメシャクナゲ。



植生を記録する様子。永久方形区内を調査するとともに、付近の種も観察しています。



ミカツキグサ。



乾燥しているイボミズゴケとムラサキミズゴケ。



シダの仲間であるマンネンスギ。